



NEWS

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017982



都市文化研究センター (UCRC) の活動の概要と運営委員会

佐金 武 (文学研究科 准教授, UCRC 副所長)

1. 活動の概要

都市文化研究センター (Urban-Culture Research Center; UCRC) は、大阪市立大学大学院文学研究科内において研究・教育を支援し、関連諸事業を牽引するために設置された (開設 2007年)。文学研究科専任教員、UCRC 研究員、特別研究員 (UCRC 研究員と兼任可) により構成され、所属する大学院生、若手研究者の研究活動に対する経済的支援や様々な機会の提供、研究成果の国際的な発信に向けた援助などにとりくんでいる。本センターはそうした活動を学内外の競争的資金を継続的に獲得することで行っており、今年度もいくつかのプロジェクトの採択および研究成果を得た。

昨年度に引き続き、学内競争的資金の獲得もあり、下記1件のプロジェクトが現在進行中である。

●戦略的研究 (基盤研究) 「豊臣期大坂城本丸の復元研究: サウンディング調査による文理融合の試み」, 研究代表者: 仁木宏教授

また、文学研究科内において専修・教室の枠を超えた将来性のある共同研究を開拓・推進するため、公募により「研究科プロジェクト」を採用して助成を行っている。今年度は2件のプロジェクトが採択され、目標とする成果を着実にあげている。

①テーマ: 都市・大阪のダイバーシティ資源活性化に関する学際的研究 (人文知と地域を結ぶデータアーカイヴの構築), 研究代表者: 伊地知紀子教授

②テーマ: 大阪の歴史・文化研究拠点の構築に関する学際的研究, 研究代表者: 岸本直文教授

さらに、若手UCRC研究員による「UCRC若手プロジェクト」の募集も行い、今年度は4件のプロジェクトが採択されている。

①テーマ: 沖縄島北部やんばる地域・国頭村における世界自然遺産登録後の環境保全および観光活動に対する意識調査, 研究代表者: 佐久真沙也加 (UCRC 研究員)

②テーマ: 堀辰雄・片山廣子における西と東の受容様相, 研究代表者: 劉娟 (UCRC 研究員)

③テーマ: 南宋臨安における交流空間の展開 (士人の活動を中心として), 研究代表者: 王世禎 (UCRC 研究員)

④テーマ: 近現代の社会と芸術活動に関する新視点, 研究代表者: 中嶋晋平 (UCRC 研究員)

研究成果の発表媒体として、雑誌『都市文化研究』および英文電子ジャーナル *UrbanScope* を引き続き発行する。また、市民への成果還元の一環として、上方文化講座を開催し、文学研究科叢書の出版を継続する。

2. 運営委員会

2022年度 UCRC 運営委員会委員は以下の通りである。文学研究科研究科長: 添田晴雄教授 (教育学)

所長: 草生久嗣教授 (西洋史学)

副所長 (事務局長): 佐金武准教授 (哲学)

事務局: 石川優特任助教 (UCRC), 庄涵淇・高野保男 (スタッフ)

運営委員会委員: 渡辺健哉教授 (東洋史学), 齊藤紘子准教授 (日本史学), 信國萌講師 (ドイツ語圏言語文化学)

以上のほか、UCRC 研究員および特別研究員も様々な活動に参加しており、これらは研究履歴として認められる。

●UCRCのホームページ

<https://www.omu.ac.jp/lit/ucrc/>

2021年度戦略的研究 (基盤研究) 成果報告 豊臣期大坂城本丸の復元研究 : サウンディング調査による文理融合の試み

仁木 宏 (文学研究科 教授)

1. 研究組織

研究代表者 (仁木) をふくめ、計9名で構成。文学研究科3名 (仁木・岸本・齋藤), 理学研究科2名, 大阪歴史博物館など市の研究機関3名, 他大学1名。

2. 研究目的・内容

豊臣期大坂城の本丸とその周辺については、江戸幕府大工頭中井家に伝わる「豊臣時代大坂城指図」がほぼ唯一の詳細な絵画資料である。しかし、同図は17世紀の絵図であるため、誤差があることは避けられない。こうした限界を克服するため、サウンディング調査などを地点をかえながら繰り返し実施し、「指図」の正確さやゆがみを測定するとともに、高低差の情報を収集してきた。

本研究では、昨年度までにひきつづき、現大阪城本丸広場においてサウンディング調査を実施した。スウェーデン式サウンディング試験は、金属製ロッド (棒) の先端につけたスクリュー (直径約3cm) を機械で垂直に

地中に挿入し、地層を貫通する際に必要となる貫入抵抗の大小から礫質・粘土質の違いを判別し、豊臣期の地表面の高さを求めるものである。またスクリューは、石垣の石にぶつかると貫入できなくなることから石垣を破壊せず、その位置や高さを知ることができる。

3. 研究経過と公開

2021年11月以前の経過については既報。第2回サウンディング調査は、引き続き「ミライザ」西側で12月16日に実施し、詰の丸と表御殿地区を結ぶ土橋の構造の解明を目指した。その結果、土橋中央部の高まりが確認できた。第3回調査は、2022年2月5日に実施した。調査地点は、同じく「ミライザ」西側で、土橋の上面が並行か斜面になっているのかの確定をめざした。結果、土橋は全体として斜面にはなっていないことが判明した。

さらに、土橋の東側の落ち込みを確認することを目指した。その結果、地表下6～7mで、石垣の可能性のある石材があることを発見した。石垣であることが確認できれば、これまでこの斜面についての調査知見がほとんどないことから画期的な成果となる。詳細の確認は、次年度以降の調査に拠る。

2021年度戦略的研究(基盤研究) 成果報告 新型コロナ禍がもたらした 救急搬送困難の時空間分析

木村 義成(文学研究科 准教授)

研究組織は、文学研究科1名(木村)、医学研究科救急医学教室1名(山本准教授)、大阪市消防局2名(出水住吉消防署長、居垣)である。

2020年1月に日本国内において初めて報告された新型コロナウイルス感染症は、丸二年経過した現在も感染流行が収束しない状況である。新型コロナウイルス感染症流行に伴い全国的に救急医療が逼迫していることが報告されている。本研究の目的は、新型コロナ禍が大阪市内の重症・中等症患者の救急搬送に与えた影響を総務省消防庁が定めた救急搬送困難の定義に従い明らかにすることである。

本研究では、大阪市消防局と共同研究に関する覚書を締結したうえで2019～21年の個人情報を含まない救急搬送記録を入手し、新型コロナ発生前の2019年4～5月、第1回非常事態宣言が行われた2020年4～5月(第1波)、第3波の小休止から急激な患者増が認められた2021年4～5月(第4波)の三ヵ年分について、重症・中等症(全体、感染症・呼吸器患者等、循環器、外傷)ごとに統計的な検討を行った。

その結果、第1波時における顕著な感染症・呼吸器患者の顕著な搬送困難、第1波時における第1回の非常事

態宣言時の行動制限による外傷事案の減少や第4波における急激な新型コロナ患者の増加による循環器や外傷などの新型コロナ患者以外の搬送困難が明らかになった。新型コロナ患者以外に該当する循環器(脳・心疾患)、外傷患者の搬送では、新型コロナ禍前後に関わらず、平日昼間帯と比較すると平日夜間帯、および休日において搬送困難が顕著に発生しやすい点と、第1波の2020年4～5月と比較すると第4波の2021年4～5月の時期の方が搬送困難の度合いが高まっていたことが示唆された。第1波時における第1回の非常事態宣言時の行動制限による外傷事案の減少や第4波における急激な新型コロナ患者の増加によって、循環器や外傷などの新型コロナ患者以外の搬送困難が影響したことが推察された。

2022年度戦略的研究(重点研究) 中間報告 豊臣期大坂城本丸地区の復元 ：発掘調査にむけての文理 融合研究の試み

仁木 宏(文学研究科 教授)

1. 研究組織

研究代表者(仁木)をふくめ、計8名で構成。文学研究科3名(仁木・岸本・齋藤)、理学研究科1名、大阪歴史博物館など市の研究機関3名、他大学1名。

2. 研究目的・内容と経過

本年度は、現大阪城の本丸広場において調査を実施している。現在の本丸広場は広く平面が広がっているが、豊臣期には詰の丸、表御殿が建つ曲輪、それらの西側に大きく掘り込まれた巨大な堀などが存在する複雑な地形であった。

本年度の第1回調査は、7月16・17日に実施した。①現大阪城天守閣南側では、詰の丸の南出口を守る巨大な櫓台の西側と南側の形状を復元するためのサウンディング調査を実施した。その結果、櫓台は従来予測されてきた地点にくらべて西南に5メートルほどずれた地点に埋まっていることを示す知見を得た。

第2回サウンディング調査は、12月10・11日に実施した。①ミライザの北側では、井戸曲輪の深さと広がりを確認しようとした。その結果、標高18メートル前後で上町台地の地山が確認されたが、これが井戸曲輪の表面ではないかと予想される。これまで、井戸曲輪についてはほとんど知見がなく、貴重な発見といえる。②現桜門内側の調査では、東西方向の多間櫓が乗る石積みを発見することをめざした。しかし、標高26メートル前後に平面が広がっており、顕著な地形の遷移が見当たらなかった。中ノ段の平面のみを調査しており、多間櫓の基礎をいまだつかまえていないものと推定される。

3. 研究の意義

本学教員と、大阪市博物館機構の職員を中心とする共同研究によって、「博学連携」の研究面での成果を積み重ねてきた。現在、本学が重点的に取り組んでいる「都市シンクタンク機能」の推進にあたって、「都市魅力」を涵養する学術的裏づけを付与することになっている。さらに大阪公立大学の森之宮新キャンパス隣接地における調査であることから、「地元」の歴史を解明するという地域貢献の役割も担っているといえるだろう。

国際交流支援事業

(イリノイ州立大学交換シンポジウム)

草生 久嗣 (文学研究科 教授, UCRC 所長)

2021年度の交流（例年であれば2022年3月上旬）は、イリノイ州立大学アーバナ・シャンペーン校 (UIUC) における助成金申請年度であったことと、継続するコロナ蔓延予防策にまつわる不安定な渡航事情のため、両校の合意のもと、見送られた。また2022年度9月に仮予定していた2022年度の行事は、同じく諸事情をかんがみて、年度末の2023年3月に延期された。その際には、イリノイ大会場にて“transnational translations/adaptations in Asia”のテーマにて開催することが予定されている。このとき、あらたにインディアナ大学東アジア研究センター (EASC) が2022年度以降、参画し、三大学による拡大交流となる予定である。あわせて、都市文化研究センター主催の、派遣若手研究者による米国中西部大学キャンパスおよびシカゴ都市区画フィールドワークの機会も同時期に行われることになる。

このイリノイ州立大学とのExchange Symposium企画は、基軸となる固定プログラムについて改善と調整を施しつつ10年におよぶ。その実際の様子については、本誌19号 (2017年) 所収の前田充洋、道上祥武共著による「(海外レポート) イリノイ・レポート: OCU-UIUC Exchange Symposiumとシカゴ巡見をとおして」を参照されたい。なお、ドイツ史を専攻とする前田氏および日本考古学の道上氏にとって、米国への学術渡航は極めて珍しい機会であったといえよう。UCRC 研究員に対する学術支援活動として有意義のものであったと考えたい。

足掛け10年になるこのUIUCへの院生・若手研究者・教員の派遣は、英語報告実績を積みだけでなく、こうした日常と異なる学術環境に接することで研究者としての知見を豊かにしてもらうことを期したものである。これはイェール大学やシカゴ大学などへの長期留学経験のある文学研究科教員が、英語支援から引率、現地指導にか

かわることで可能になっているものであり、事務方含めた関係者の協力に感謝したい。今後は、イリノイ州立大学側からも、本学からのイベント招聘に応じて、専任教員を派遣し特別講義を提供する体制や、イリノイ州立大学生の来阪支援も構想中である。

『都市文化研究』編集委員会

宋 恵媛 (文学研究科 准教授)

1. 2022年度委員

宋恵媛 (文学研究院准教授 アジア文化学 編集委員長)
山本真由子 (文学研究院准教授 国語国文学 編集主任)
古賀哲男 (文学研究院准教授 英語英米文学)
笹島秀晃 (文学研究院准教授 社会学)
辻 香代 (文学研究院准教授 言語応用学)
沼田里衣 (文学研究院准教授 文化資源学)
橋本博文 (文学研究院准教授 心理学)
平田茂樹 (文学研究院教授 世界史学)

2. 第25号の編集と刊行

2022年度は第25号の編集を行なった。研究論文4本、研究ノート4本、研究展望1本、書評1本を掲載した(本誌)。

電子ジャーナルUrbanScope編集委員会

川野 英二 (文学研究科 教授)

2021年度編集の第13号が2022年7月22日に発行された。今年度の内容はいずれもTranslationで3本が掲載されている。2本が教員の日本語原稿の翻訳、1本が大学院生の日本語論文を英訳したものである。前年度からの持ち越し分の1本もあり、昨年度に引き続き旧委員に非常に丁寧なチェックを行なっていただいた。今年度編集委員長の川野が前半在外研究で不在であったため、その間の進行を前年度委員長の祖田先生にお任せして、たいへんご苦勞をおかけした。また、今年度は随時Teamsで連絡を行ない、資料や情報の交換を迅速に行なうよう心がけた。

今年度の編集委員会ではUrbanScopeの今後についても議論を行なった結果、来年度の14号で廃止とすることとした。研究の海外発信や翻訳支援の役割については別

のかたちで事業継承することを考えている。

2022年度編集の第14号は、川野・川邊・堀・辻が担当している。

文学研究科叢書 編集委員会

佐賀 朝（文学研究科 教授）

2021年8月12日の図書刊行委員会において、文学研究科叢書第12巻『周縁的社会集団と近代』の改訂版企画書が承認された。2022年度に入ってから、同書の編集状況は随時、同委員会で確認されながら事業が進められた。本書は、2017～19年度に文学研究科が推進したJSPS国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業「周縁的社会集団と近代—日本と欧米におけるアジア史研究の架橋」（代表：塚田孝教授）による国際共同研究成果を軸にしたもので、2020年度に開催が予定されたもののコロナ禍の影響で2021年度に延期、開催された「大阪市立大学国際学術シンポジウム2021オンラインセミナー・シリーズ」の成果も加えて企画・編集された。

上記のオンラインセミナー・シリーズは、育成事業による国際共同研究の成果をふまえて、2021年9月から2022年3月にかけて、合計7回にわたりzoomによる連続セミナーを開催したものである。ここでは、アジア各地の近世～近代移行期における下層民や遊女、宗教的少数派など周縁的な社会集団の存在形態やそれにアプローチするための史料のあり方の国際比較も実践され、多くの成果を上げた。本シリーズでは、叢書第12巻への寄稿も念頭にセッションが生まれ、例えば2022年3月開催の最終セミナーでは、上海社会科学院の馬学強氏が研究報告を行い、同氏の報告内容と渡辺祥子氏によるコメントは、いずれも叢書第12巻の原稿として反映されている。

叢書第12巻では、大阪公立大学を含む日本史・アジア史の研究者のほか、イェール大学、シンガポール国立大学、上海大学、ノースカロライナ大学シャーロット校、上海社会科学院など、海外の多彩な日本史・アジア史研究者も参加する形で、総勢20人の研究者が近世～近代移行期の周縁的社会集団を多角的に論じている（原稿本数は22本）。2023年2月末には刊行の運びとなる。

なお、上記シリーズの後継企画として、2022年度には「国際学術シンポ2021フォローアップ・セミナー2022」も用意され、2022年6月から2023年2月にかけて4回にわたるオンラインセミナーが開催された。このうち、2022年12月に開催された第3回セミナーでは、叢書第12巻に寄稿いただいたイェール大学のダニエル・ボツマン

氏の論稿「19世紀日本における牛、人間、そして「進歩」」を取り上げて、近世～近代移行期におけるヒトと動物の社会関係の変容と、それに迫る社会史的方法をめぐって活発な議論が交わされた。欧米と日本の近代化を、それぞれが有する固有の歴史社会の構造をふまえて、帝国主義の問題にも留意して相互の関係史として、どのように捉えるかが、そこでの焦点であった。

これらの事業は、UCRCに設置されている「周縁的社会集団国際共同研究プラットフォーム」の活動として2023年度以降も継続的に展開される予定である。当面、2023年度には、叢書第12巻の多彩な成果をめぐって、さらに議論が重ねられることになる。

2021年度 文学研究科プロジェクト 成果報告 大学所蔵の歴史資料を基盤とした 大阪の歴史・文化研究拠点構築

仁木 宏（文学研究科 教授）

1. 研究の目的と概要

大阪の歴史・文化の重要性、文学研究科の研究蓄積、大学に近世～近代の膨大な古文書を所蔵していることをふまえ、新大学において、大阪の歴史・文化に関する研究拠点の形成をめざし、その基盤づくりを進める。

2. 研究組織

仁木宏・岸本直文・佐賀朝・磐下徹・齊藤紘子（日本史学専修）、久堀裕朗（国語国文学専修）、水内俊雄（地理学専修）、塚田孝（名誉教授）、田中ひとみ・渡部陽子（大学史資料室）、渡辺祥子（科研研究補佐）、呉偉華（UCRC研究員）

3. 研究経過と成果

月1回の定例研究会を開催した。そこでは、これまでの市大所蔵史料を用いた研究内容と、今後の発展性について共有を図るよう努めた。既存研究全体の概要、道修町一丁目で薬種中買を生業とした鍵屋茂兵衛文書（3850点）、北堀江五丁目で酒造業を営んでいた名田屋清兵衛文書（約800点）、元伏見坂町で茶屋を営んだ伏見屋善兵衛家文所（1200点余）による研究を取り上げた。また新たに、江戸時代以来の花街である南地の、明治40年代の「大坂南廓娼妓履歴及契約書綴帳」を検討した。

また、塚田が研究代表者である科研基盤研究Aとの共催で、近世大坂〈史料と社会〉円座《吉野五運をめぐる全体史》を開催した（9月20日）。

学内資料の整理は以下の通り。①近世資料（〈日本経済史資料〉・〈近世史資料〉）および近代資料（〈大阪市史編纂資料〉）の、点検と整理状況のリスト整備を行った。②「大坂三郷土船仲間文書」（約300点）、「河内国誉田村

文書」(約300点)ほかについて、文学研究科に借り出し、目録作成・写真撮影・翻刻の作業を進めた。これらは、目録の点検および画像を整え、順次、公開を進める予定である。また、杉本村山野家文書について、大学史資料室および杉本町との合同で、日本史研究室で資料調査を行った。

さらに、大阪の歴史・文化研究拠点構想について検討し、資料を活かし独自の研究活動を進めつつ、大阪府における研究のハブ的機能をめざすこととした。

2021年度 文学研究科プロジェクト 成果報告 芸能文化資料の基礎整備と研究活用 ：上方文化の研究拠点形成をめざして

奥野 久美子 (文学研究科 准教授)

本研究は、芸能文化研究の環境整備を目的とし、吉沢英明氏の数万点の芸能文化資料コレクションの本学への受入れと整備、一部資料のデジタル化、および研究活用を目的としたものである。吉沢英明氏は、約半世紀にわたり講談など大衆演芸の研究を続け、資料を蒐集してきた研究者であり、講談本を中心とするその蔵書、すなわち〈吉沢コレクション〉は、質量ともに他の追随を許さない私的コレクションである。本研究科では2021年度、吉沢氏よりこのコレクションの寄贈を受けた。

活動経過としては、2021年7月と8月に埼玉県にある吉沢氏の書庫へプロジェクトメンバー数名で出張し、資料の選別をしたうえで、8月末に受贈資料を本学と大阪府立大学に分けて搬入した。受贈資料はダンボール667箱に及んだ。その後は虫害対策等の資料保管環境を整えながら、目録をとる作業を進めた。

研究成果報告として、2022年2月20日(日)に、大阪在住の上方講談師、旭堂南海師を招いた報告会をzoomで開催した。学内や関係者に限った小規模なイベントとして企画したが、当日は参加者60名を超える盛況で、吉沢コレクションへの学界の関心の高さがうかがわれた。また、南海師をはじめとする現役の講談師が、講談の創作に活用するために吉沢コレクションの整備公開を待ち望んでいることも明らかにされ、コレクションが今後、学界のみならず演芸界でも活用されることが大いに期待された。

成果物としては、この報告会の様子やコレクション受贈の経緯を、URPブックレット『上方・大阪都市文化の研究拠点形成—大学アーカイブの整備と発信—』(西田正宏・奥野久美子編 2022年3月)にて報告した。受け入れの経過や作業の詳細についても、写真を多数まじえつつ同書で報告した。2022年度初めには吉沢コレク

ションの紹介を含む研究科特設HPが開設され、そこに掲載した資料解題も本プロジェクトの成果である。なお、吉沢コレクションの整備と研究は2022年度にも継続中である。

2021年度 文学研究科プロジェクト 成果報告 性愛をめぐる人間学の試み ：「性的倒錯」とは何か

土屋 貴志 (文学研究科 准教授)

1. 研究の目的と概要

「性的倒錯」とは、「本来の性愛」からの逸脱か、性愛に関する何らかの社会・文化的規範に対する違反の、いずれかあるいは両方に該当すると論じられる一方で、「本来の性愛」や「倒錯」という概念そのものに対し懐疑的な立場もある。本プロジェクトは、「性的倒錯」とみなされうる性行動の実証的調査および文献テキスト分析を踏まえ、「性愛および『性的倒錯』とはそもそも何なのか」という根柢的問題について考察した。

2. 研究組織と概要

- ・文化パート：石川優 (UCRC特任助教)、野末紀之 (文化構想学専攻表現文化学専修教授)。「性愛の逸脱性はどのように表現されてきたのか」を文学作品やポピュラー文化のテキスト分析から明らかにした。
- ・社会パート：濱野ちひろ (UCRC研究員)、新ヶ江章友 (人権問題研究センター／都市経営研究科教授)。「社会において様々な性行為や性関係はいかにして実践されるのか」を当事者への参与観察などをつうじて実証的に追究した。
- ・哲学パート：佐金武 (哲学歴史学専攻哲学専修准教授)、土屋貴志、西澤徹臣・松山あき (文学研究科哲学専修前期博士課程)。社会および文化パートの成果を参照しつつ、議論の枠組みや概念を整理した。

3. 研究経過

- ・哲学パート：文献サーベイをもとに議論する研究会を毎週実施し、その成果は、12月3日に開催したワークショップ、および2022年5月29日に応用哲学会第14回年次大会で発表。
 - ・文化パート：文献調査の成果を2月22日に公開研究会で発表。
 - ・社会パート：現地調査の成果等を踏まえたワークショップを3月7日に実施。
- 各パートの研究成果を集約する全体シンポジウムを3月25日に開催。

なお、本プロジェクトの共同研究は、日本学術振興会科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽、2022-24年度)と

して採択され、今後も継続していくことになった。最終的には研究成果を論文集にまとめる企画も進行中である。

2022年度 文学研究科プロジェクト 中間報告 都市・大阪のダイバーシティ資源活性化に関する学際的研究 ：人文知と地域を結ぶデータアーカイブの構築

伊地 知紀子（文学研究科 教授）

生野区は、戦前から在日コリアンが集住する地域であり、人文知の展開に繋がるダイバーシティ資源を豊富に蓄積してきた。2022年夏には、御幸森小学校跡地を活用した多文化共生のまちづくり拠点となる「いくのコーライズパーク」が始動するほかに、コリアタウンを構成していた3つの商店街が2022年4月より統合されコリアタウン組合として地域活性化に向けた多様な事業を展開していく。現在、韓流は一過性のブームではなく、K-Cultureと名称を変更しグローバル化の先端を担っているが、コリアタウンを中心とするこの地域は、こうした世界的動向と連動しながら地域固有の歴史性を活かした体感型教育エリアの構築を模索している。本プロジェクトは、こうした地域の実情を踏まえ、大阪に位置する大学であるからこそ可能となる連携のあり方を具体化していくための基礎的研究となる。

本プロジェクトでは、(1) 近現代都市・大阪の周縁部に位置づけられた猪飼野地域の1960年代を活写してきた写真家・曹智鉉氏による写真約2000点を、当時の猪飼野地域の社会、経済、教育、職業、文化に関する証言を収集する検討会を3回開催した。いずれも猪飼野地域の人びとに多く参加をいただき、貴重な証言記録を得ることができた。現在、これらの情報を元に、デジタル・アーカイブ構築の基礎作業に入っている。また、(2) フォト・ドキュメンタリー『女たちの猪飼野』(1987)の登場人物や猪飼野地域の市民活動を牽引していた人びとを講師とし、「生野の女たち」というテーマで3回の連続市民講座を開催するとともに講師の語りを採録した。いずれの内容についても参加者から好評を得ており、貴重な証言の記録となるだけでなく、広く社会に還元できる課題であることから、継続テーマとして検討する必要性が確認できた。

2022年度 文学研究科プロジェクト 中間報告 大阪の歴史・文化研究拠点の構築に関する学際的研究

岸本 直文（文学研究科 教授）

1. 研究の目的と概要

2021年度のプロジェクトを発展させ、大阪の歴史・文化に関する研究拠点の形成をめざし、その基盤づくりを進める。その上で、杉本図書館の近世・近代の古文書のみならず、文学研究科が2021年度に寄贈を受けた講談本の吉沢コレクション、中百舌鳥図書館の和歌・俳諧・演劇などの資料が加わり、新大学が他にない質・量を誇る学術資料をもつに至ったことは大きい。

2. 研究組織

仁木宏・岸本直文・佐賀朝・磐下徹・齊藤紘子（日本史学専修）、奥野久美子・久堀裕朗（国語国文学専修）、西田正宏（国際基幹教育機構）、菅原真弓（文化資源学専修）、安竹貴彦（法学研究科）、彭浩（経済学研究科）、阿多信吾（情報学研究科）、塚田孝・水内俊雄（名誉教授）、田中ひとみ・渡部陽子（大学史資料室）、渡辺祥子（非常勤講師）、呉偉華（UCRC研究員）、大澤研一（大阪歴史博物館館長）

3. 研究経過と予定

共同研究者として、国文学・美術史、法制史・経済史、情報学のメンバーほかを加え、学内の戦略的研究「重点研究支援」に応募した。不採択となったが、この体制で文学研究科プロジェクトを進めた。

学内資料の整理として、昨年度から続く「大坂三郷土船仲間文書」と「河内国誉田村文書」の画像公開にむけての作業、〈大阪市史編纂資料〉の目録作成を、特設サイトへの公開にむけて進めている。

定例研究会では、吉沢コレクション、大学所蔵和書類について、大阪の近世絵図、古地図や空中写真、杉本村山野家文書、〈大阪市史編纂資料〉、上方浮世絵における名所絵、「道頓堀裁判」関係資料、中百舌鳥図書館の和書類などを取り上げた。また、奥野が研究代表者である三菱財団助成研究との共催で、公開研究報告会《吉沢コレクションと講談の世界》を開催した（11月23日）。さらに、大阪府におけるハブ的機能を模索するため、府・市や他大学の研究者と、大阪の歴史遺産の保存・活用を考える意見交換会を立ち上げている。

2021年度 UCRC 若手プロジェクト 成果報告 社会問題としての「性暴力」 ：NHKにおける可視化とフェミニスト運動との 関係性（2010年～）

伊東 由紀子（UCRC 研究員）

本研究は、「公共メディア」を目指すNHKが「性暴力」をどのように描いてきたか、2010年からの今日までに焦点を当て検証した。NHK番組視聴、性暴力に関する番組統計、半構造化インタビュー、行政文書を元に、NHKの支配的なフレームと、メディア・アジェンダの2つの面から分析した。閲覧制度上の限界により閲覧可能番組が限られた。それでも、関連番組の番組数増加と視聴可能番組の内容から見て、性被害者に寄り添ったフレーミングの適用、さらに政策アジェンダ（2回の刑法改正の動き）、公共アジェンダ（フラワーデモなど）との相関関係が認められた。研究成果は、2021年3月都市文化研究フォーラムで発表され今後の研究に多くの示唆をいただいた。番組で取り上げられる大半の事例がレイプであり、「性暴力連続体」の幅広いスペクトラム上の極端なケースであったことについて、視聴率、制作プロセスなど様々な面からの検討課題としたい。

2022年度 UCRC 若手プロジェクト 中間報告 沖縄島北部やんばる地域・国頭村における世界自然遺産登録後の環境保全および観光活動に対する意識調査

佐久眞 沙也加（UCRC 研究員）

本研究は2021年7月にUNESCO世界自然遺産の一部として登録された沖縄島北部やんばる地域において地域住民の観光や環境保全活動に対する意識を明らかにすることを旨とし、自然環境と地域の日常生活を観光資源としてむらおこしを行ってきた地域において世界自然遺産登録および新型コロナウイルスの感染拡大がどのような影響を及ぼしているのかを中心に聞き取りを行った。

民泊受入家庭および国頭村観光協会を対象に行った聞き取りでは、コロナ禍によって民泊受入が途絶えたあと地域における補助金申請支援の仕組みが整わず多数の受入家庭が活動の継続を断念するなど、従来の営業活動以上の役割が求められている点が明らかになった。一方、野生生物保護活動に関わる従事者らへの聞き取りからは生態調査やモニタリングの仕組みづくりが途上過程にあり、特に森林利用をめぐるルール設定や場の保存において異業種間での連携が課題となっている点が明らかになった。

2022年度 UCRC 若手プロジェクト 中間報告 堀辰雄・片山廣子における東と西の受容様相

劉 娟・永井 泉（UCRC 研究員）

本プロジェクトは、親交関係のある堀辰雄と片山廣子という二人の作家を通して、大正から昭和にかけての日本文壇における東西両洋の文学受容の一側面を浮き彫りにするものである。

8月に、堀辰雄文学記念館（軽井沢）に所蔵してある堀の旧蔵書30余点を閲覧した。その中の半数くらいには、おびただしい書込みメモが残っている。現在、それらの蔵書メモの整理・選別の段階にある。片山廣子に関しては、大森時代の歌にみられるアイルランドの作品からの影響に着目し、8月に大田区立郷土博物館や馬込文士村記念室（東京）を訪れ、時の大森の様子や文学者たちの交流関係等、廣子の作品の背景に関する情報を得た。現在は、当時の廣子の短歌と、アイルランドの詩人 Francis Ledwidge の作品について、自然の風景や生き物の描写という観点から影響関係の検討を行っている。

2022年度 UCRC 若手プロジェクト 中間報告 南宋臨安における交流空間の展開 ：士人の活動を中心として

王 世禎・金 甲鉉・庄 涵淇・劉 藍蔚（UCRC 研究員）

本プロジェクトは「空間」の中でも都市空間内における人々の「交流空間」に着目し、どのように交流が行われ、文化・政治・学問の交流として実現できたのかを検討し、交流空間の形態と展開を解明することを目的とする。そのため、三つの方面（茶館、太学、園林などの空間における交流像、都市空間の変化をめぐる情報交流、都市空間における士人の交遊活動と相互交流）からの分析を試み、一種の「境界」である都市空間における外来士人の生活と活動に焦点をあて、臨安という都市空間の中で人々と付き合っていたかについて検討する。その一環としてメンバーは、2022年8月より月1回の共同研究会を開き、各自の研究進捗を共有してきた。王は茶館における人々の日常的な交流像について、金は学校を中心とする学生と官僚の交流について、庄は園林空間を中心に都市祭りなどの中での交流像について、劉は都市空間内での祠廟を中心とする交流像についての分析を進めている。

2022年度 UCRC 若手プロジェクト 中間報告 近現代の社会と芸術活動に関する新視点

中嶋 晋平 (UCRC 研究員)

本プロジェクトの目的は、近現代における芸術と社会との関係について、異なる専門性を有する研究者同士が多角的に検討することで、新たな知見を見出すことにある。共同研究者の山上紀子は、19世紀フランスで活動した画家オディロン・ルドンの美術作品に、従軍、病などルドン個人の経験と帝国主義時代のフランス国民の精神がどのようなかたちであらわれているか検討している。2022年9月にパリおよびボルドーの美術館などで、頭部が描かれた複数の作品について、明白な図像のみならずそこに見出される痕跡について調査した。代表研究者の中嶋晋平は、大正期の日本海軍による軍楽隊を通じた広報活動の実態について、海軍の公文書や地方紙を対象に調査分析を行っている。2022年9月、20世紀メディア研究所の第159回研究会で分析結果を報告した。これらの調査や研究会での指摘を踏まえ、2月の都市文化研究フォーラムに向けて準備を進めている。